

2 年 生 部 会

1 子どもの姿のとらえ

昨年、幼稚園から小学校への子どもたちの大きな環境の変化を、接続期を中心に意識的に受け止め、丁寧に見守りながら活動してきた。「安心して、自分を表現できるように」をねらいとして幼稚園の先生とも共通理解をはかりつつ、ほどよい緊張感の中で子どもたちが安心して活動できる場を探ってきたのである。接続期を終えてからは、学校生活への適応をより図りながらも、子どもたちが協働して作り上げていく学習の場面を保証し、働きかけを続けた。安心をベースに子どもたちの活動の範囲を広げてきたことが、子どもたちの学習にとっても有効であったと考えている。（昨年度要項参照）

2年生に進級し、担任は替わったが、クラス編成替えはしていない。エネルギーにあふれている子どもたちである。クラスのみんなが知り合いという安心感もあり、自分をのびのびと表現することができるようになってきている。しかしクラスの中の関係に留まっている子が多く、昨年度末の課題を引き継ぎ、友だち関係を広げられるように働きかけることを進級当初の課題とした。

一方、クラスの中を見ても、関係や役割が固定化していきそうだと感じる部分がある。たとえば、話し合いの時に、誰かが意見を言うのを待ち、出た意見にすんなり賛同する姿や、時には自分の意見を持たずに、ぐいぐいと意見を言う子に任せてしまう姿も見られた。また、自分らしい表現をさせたいということが教師の願いではあるが、まだまだ人の話は聞かずに自分のことばかり考えて自分勝手に発言したり、自分の話だけを聞いてもらおうとしたりする姿もある。

このような課題をうけ、まずは「人の話を受容的に聞くこと」に重点を置いた。友だちの話を自分のこととして聞くことができれば、友だちの気持ちも想像できるであろう。他者の存在を意識し、相手の気持ちを考えながら行動や発言ができる子どもたちを育てたい。

2 教師のねがいと手立て

「かがやくは自分で考え行動だ」と子どもたちは目標を立てた。（「かがやく」は学年の愛称）

これを受けて、教師は、自分の考えを持ち、友だちと考えを伝え合うことで自分の考えをよりはっきりさせる経験をさせたいと考えた。そして自分の考えを持つには人の話を聞かなければならないことを伝えていくことに力を入れていこうと考えた。

安心して自分を表現できるようになってきた2年生。子どもたちの中に力関係ができてきたとはいえ、そうした関係性に縛られずに本音で話し合える2年生でいてほしいと思う。また2年生のうちいろいろな役割を経験してほしいと思う。

こうした願いを持って、2年生として取り組んできたことは次の3つである。

- ① 考えを聞き合い、伝え合える環境作りを心がける。
 - ・一方的に知識を伝達するのではなく、子どもたちの意見やつぶやきを拾い上げ、つなぎながら学習を進めていく。
 - ・1つの考えについて、子どもたちがじっくり考えられるような言葉かけをする。
 - ・人の話をしっかり聞くように意識させる。
- ② いろいろな表現方法、表現形態（様々なグルーピング）を取り入れる。
 - ・クラスの枠をはずし、学習の目的に応じたグループ活動を組む。

- ・担任団が複数の目で子どもを見ることで、子どもたちが安心していられる空間を広げる。
- ③ ファミリーやクラスの話し合いを通して、自分の考えを決める機会を作る。
- ・友だちの意見も聞き合って、グループの考えとしてまとめる話し合いの機会を作る。
 - ・自分の考えをよりわかりやすく伝える工夫をさせる。

このような手だてをもってどのように学習を展開していったのかを実践を通して考察する。

3 実践からみた子どもたちの姿

前述したように、安心をベースに1年生の活動を行ってきた子どもたちは、お互いの関係を育む中で自分を素直に表現するようになってきた。ところが1学期後半、ずっと続けてきて上手になったスピーチ（クラス全員の前で順番に話をする）について「なんか緊張するなあ」と言った子がいた。安心して表現できていたはずなのに子どもたちの意識に変化が見られたのである。これは、言い換えれば相手（聞き手）を意識し始めたと言うことではないかと捉えた。自分の考えを聞き手にわかりやすく話したいという気持ちが出てきたのであろう。この子どもの中から出てきた「相手によりわかりやすく伝える」という課題を教師側も大事に受け止めて、他者意識をどう育てていくかを様々な学習場面を通して模索している。

(1) 「スイミー」での話し合い ～自分とは違う考えに気づき、共感する～

主人公の「スイミー」はたくましく勇気があり、知恵もある。そんなスイミーに共感しあこがれ、スイミーの気持ちに寄り添って読みとっていきことは、「相手の気持ちを想像する」ことを学ぶ大事な学習ととらえた。話し合いの中で見られた違いに気づいた発言の例を挙げたい。

第Ⅱ場面 楽しく暮らしていたスイミーとその兄弟たちに大きなまぐろがおそいかかり、兄弟たちはみんなのみこまれ、スイミーだけが逃げられた場面

T：このときの気持ちをスイミーになりきって考えてみましょう。

ふきだしに書いたことを発表してくれる？

C1：兄弟たちがみんな食べられてしまって悲しい

C2：ひとりぼっちになってさみしい

C3：ひとりでこわい

Y：ひとりだけ生き残ってよかった

K：兄弟がいなくなってよかったなんてぜったいに思わない

S：ぼくには兄弟がいるけれど、兄弟が死んでぼくだけ残ったら悲しい

H：でも逃げられてよかったってスイミーは思ったかもしれない・・・

命が一番大切だから助かってよかったって思ったかもしれない。

多くの子どもたちが「それは違うよ」と思ったYの発言に対して、Hのそれを認めるようなつぶやきに教室の空気が一旦止まったように感じた。1、2分の沈黙の後、ふわっと空気がやわらいた。

今回のこのYの発言は、登場人物の気持ちはいろいろと想像できると気づかせた。そしてHのつぶやきによって、友だちは自分とは違うことをいろいろ考えているんだと気づくことができた。友だちの考えを分かり合おうとする大事な話し合いの時間になった。

(2) 「かがやくエコの町」をつくろう！

① 試行錯誤の話し合い

1学期に学習した学校の周り探検と町の地図作りを発展させて、2学期は町作りをしようということになった。実際にどんな町をつくるのか、クラスで話し合ったことを持ち寄り、学年全員で話し合っ「かがやくエコの町」と決まった。その後、クラスごとに活動の希望を取り、最終的に8種類のテーマ

に分かれて、グループを作り活動することになった。「見て聞いてやってみて」というスローガンを掲げたが、実際に自分たちのグループではエコの何をすればいいのか悩むグループも多く、試行錯誤の時間が流れた。「しぜんIグループ」の子どもたちの様子は以下のものであった。

一人一人自分のしたいことがまちまちでグループとしてまとまらず、まとまろうとしなかった。自然破壊について調べようとしている子、学校園にいる虫をつかまえてお店においておきたい子、生ゴミから堆肥を作る作り方を調べ出す子、植物をお店に置いてそれでできたと思っている子……何回か話し合いをしたが、結局調べる内容は1つにせず、同じコーナーに並んで自分で調べた内容をそれぞれ発表すると決まった。ところが……

メンバーの一人がどんぐりを大量に拾って持ってきた

これをきっかけに、グループが1つにまとまりそうな気配が現れた。さらに、

「どんぐりの木を育ててね」と呼びかけたら！

という教師の言葉かけで子どもたちの意欲がぐんと高まり、どんぐりやどんぐりの木について調べたり、5こずつ入れる袋作りをみんなでしたりとグループとしてまとまっていった。その袋も、初めは教師が用意したビニールの袋を使ったが、足りなくなると今度は裏紙を使って自分たちで袋を作り始めた。「ぎんなんグループ」が工夫して袋を作っているのを見て、自分たちもやってみようと思ったようだ。袋には「どんぐりをそだててね」というメッセージがついていた。

“どんぐり”という「しぜん」グループにぴったりの具体物が登場したことで、俄然話し合いのポイントが絞られた。また、教師のタイミングのいい投げかけの言葉によって、自分が何をしたらいいのか見通しが立ち、やる気を持って活動に取り組むことができた。子どもが本気で物事に向き合ったとき、アイデアも浮かぶし、友だちのアイデアも取り入れようとする。このグループの子どもたちはこのあとの発表の練習にも力が入り、「かがやくエコの町」当日も自信を持って発表していた。

② ふり返りが次への一歩

「かがやくエコの町」は1回目は子どもたち同上で、2回目は家の人を招待して行った。

1回目は準備不足、発表の練習不足ではあったが、とにかくやってみて、他のグループが何をしているのかを知り、交流する中から自分のグループの発表のヒントを見つけ出したり、次にはこうしてみようというさらに進んだ課題に取り組んだりできればいいと考えた。

1回目の「エコの町」開催の後、他のグループを見て思ったこと、エコについて気づいたことを話合った。子どもたちは話し合いもそこそこに、次のエコの町の開催に向けて準備を始めようとした。グループごとに集まり、自分たちで相談を始めた。こうしたらいいというイメージがわき、グループの目標が定まり、みんなが1つの方向を向いて活動を始めたのである。家の人を招待して行った「第2回かがやくエコの町」の活動では、見通しをもち、自分の役割を認識して活動する子どもたちの姿が見られた。

4 公開研究会での授業提案や協議会の話し合いから

(1) 部会として授業改善のために目指したことや、そのための手立て

- ・考えを聞き合い、伝え合える環境作り
聞き合いを促す働きかけ、言葉かけ
- ・様々な表現方法の体験
- ・グルーピングの工夫

- ・話し合いを通して自分の考えを決める機会
- ・じっくり取り組める時間の確保

(2) 具体的な成果や問題点

- ・子どもたちが色々な子と関わりを持とうとしていること
- ・「話す人が話しやすい聞き方」の意識の高まり
- ・集中して聞くことのできる環境作り 人数・オープンスペースの使い方
- ・発達にあった活動内容や方法の検討

(3) 協議会での話題・意見・質問など

- ・まだ、自分が大事な段階。違いを共有することができるのか。どういう違いなら子どもの意識として共有できるのか。
- ・話を聞きあう、伝えあうための具体的段階や、方法を知りたい。
- ・いろいろなグルーピングがこの発達においてどうなのか。6人は、グループとして多くないか。他の子に任せてしまってる子もいるのでは。

(4) 協議会を経て、今後の課題であると認識したこと

- ・授業を見て、「公共性」と「達人」（なかまの学習のめあて）と2つのテーマがあった。どちらをねらっているのか。「公共性」に重きがおかれているようだがと言う指摘があった。テーマを考えていくうちに、「公共性」自体が目的となってきたように思われる。分野教科で研究を続けていくとすると、分野の内容と「公共性」との関わりを明確にしていく必要があると感じている。「公共性」は社会を学習するにどのような方法で指導？
- ・活動のめあてを明確にし、活動していく中で「公共性」を見とっていくことが大切。
- ・子どもたちにはまず、「聞く」ことをもっと意識づけていく必要性を感じている。
- ・2年生は自分の意見を通す発達段階。本音が出せる活動の中で、ぶつかり合いをどう解決していくのかを大事に見ていく。